

児童の遊びの実態とその変化についての研究

－ A小学校の児童に着目して－

岡本 浩一郎（京都教育大学）

1. 目的

本研究の目的は、京都教育大学を校区に含むA小学校の児童に焦点を当て、現在の小学生の遊びの実態について質問紙調査を行い、その分析に基づいたフィールド調査を通して、子どもの遊びの変化を検討することである。

2. 研究方法

1) 対象者

①質問紙調査について

A小学校児童2・4・6年生 合計326名

②フィールド調査について

調査対象の遊び場に来た小学生

2) 調査方法

①質問紙調査について

10月中旬に学校に配布し同下旬に回収

②フィールド調査について

質問紙調査で最もよく遊ぶと回答された場所において、児童の遊んでいる様子をフィールドノートに記録した。

3) 分析方法

①質問紙調査について

学年や遊びの種類などによってクロス集計を行い、それらの関係性について検討した。

②フィールド調査について

フィールドノートをもとに20年前の同様の研究と比較分析を行った。

3. 結果と考察

1) 質問紙調査について

平日及び休日の室内遊び、外遊びでの遊ぶ時間を学年ごとに比較すると、2年生が最も多く、学年が上がるにつれ、遊ぶ時間数が少なくなっていることが明らかとなった。特に平日の外遊びの項目でその傾向が顕著に表れ、まったく遊ばないと回答した6年生は28.1%にもなった(図1)。

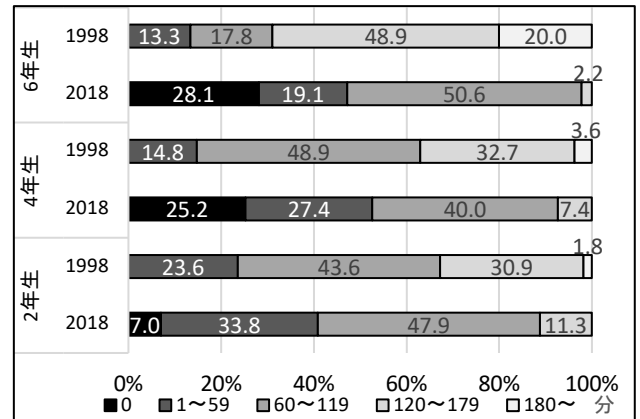


図1 平日の遊ぶ時間数の比較

2) フィールド調査について

好きな遊びは男女で差があり、遊びの種類数や観察された人数に関しては男子児童の方が多く、男子児童の方が外遊びに積極的であるということが推測された。

3) 先行研究との比較について

遊び方を工夫する必要なく、自らの体1つで遊ぶことのできる固定遊具が非常に人気があること、ルールが明確で、勝敗が即座に決まるかけっこ遊びが非常に多いことが明らかとなった。一方で、自ら遊び方を考えて工夫して遊ぶことが必要な自然遊びやボール遊びは減少傾向にあった。このことから、今回観察した範囲においては、創造的な遊びが少なく、ルールが明確な遊びに偏っていることが懸念された。

4. 結論

本研究では、先行研究と比較して、児童の遊ぶ時間数が減少しており、遊ぶ時間の減少率は学年が上がるごとに顕著であることが明らかとなった。さらに、創造的な遊びが少なく、ルールが明確な遊びに偏っていることが懸念された。

5. 主な参考文献

- 1) 麻原君枝 (1998) 藤ノ森小学校区外遊び場マップ作成と児童の外遊びの実態. 京都教育大学卒業論文.